様式(細則6-2)

年　月　日

浜田市議会議長　様

議員名　牛尾　昭

研　修　受　講　報　告　書

下記のとおり研修を受講したので報告します。

記

1．研修名

里山の棚田から進める大規模農業経営～小麦と水田のシナジー生み出す可能性～

2．受講の目的（市政との関連など）

弱小農家への支援について

3．期間（移動日を含む）

令和7年4月4日（金）～　令和　年　月　日（　）

4．経費　1000-　円

（経費内訳　受講料　　円、旅費　　円）

5．研修のポイント・議員活動や市政への反映など

中山間地農業の課題解決。

6．研修内容
（詳細は別紙のとおり）

浜田市議会 受付 7.4.18

研修日程、令和７年４月４日、１９～２１時

研修先、スマート・テロワール協会オンライン講演会第３１、

テーマ、里山の棚田から進める大規模農業経営～小麦とトウモロコシが産み出す可能性～

講師：野村文雄氏「宇部市株ｆａｒｍ１７社長８０ｈａ営農

コメンテータ：浅川芳裕氏

進行：藻谷浩介氏：日本総研上席研究員。

野村文雄氏～中山間地で８０haを営農。

・お米が高騰したこの冬。農林水産省は「転売を狙った買占めが理由だ」と言い訳していました。ですが農業や流通の現場の人は口々に「実際に米が足りない」と言います。

「生産量が落ちたのでは」と。多年の減反政策のせいだという人もいますが、最大の理由は高齢の兼業農家の引退ではないでしょうか。零細の高齢農民が引退して買う側に回り、儲からないので後継者はなく、耕作放棄地が増えているのでは。

そんなことを言っても、耕作放棄されるような狭い農地で、若い人が食べられる農業は出来るのでしょうか？お米の生

産も心配でしょうが、パンや麺類に使う小麦も、消費額は米と同額以上で、しかも輸入依存です。

牛・豚・鶏に卵の生産も輸入されたトウモロコシに依存しています。これらの供給も大丈夫なのでしょうか？都会の椅子に座って考えると「むり！」となりそうですが、現場には不可能を可能にする人たちがいます。

４７都道府県で、長崎県の次に平野に乏しい山口県。長州藩時代に開墾された棚田が、無数にあります。そんな棚田や、かっての茶畑を仮受け、お米や野菜、小麦、飼料用のトウモロコシも作付けする会社。それが宇部市の farm17 です。週末には、自家製の小麦粉で焼いたパンも売っています。

晩秋の棚田に幻想的な灯りをともし、ライブや屋台を楽しむ「里山棚田灯りまつり」も六回を数えます。

Farm17 を経営する野村文雄氏は、６０歳で会社経営を引退し、２ha の棚田を引き継いで農事法人を設立しました。以来１３年間に、周囲の農家から耕作を引き継いだ棚田や茶畑は８０ha に拡大し、２年前に株式会社化。ベテランと若手が力を合わせる経営で、棚田の畑地化や農耕連携、耕畜連携

の先端を走っています。伴走するのは、故郷山口でスマアート・テロワールを実践に邁進する農業戦略コンサルタント浅川芳裕氏。循環再生を実現しつつ、同時に儲かる農業を指南しています。

考察、昨年度の研修会でも、指摘されたが、小規模・兼業農家が抱える中山間地の耕地は、飼料として小麦やトウモロコシ、もしくはソバを植える。そうすると、飼料の輸入量を抑える事が出来る。併せて労働時間の軽減化に繋がる。水稲は、平地で更に大規模化し、各々機能分担し食料安保対策として、農業施策の大転換を図るという結論を得ました。

以上報告します。碧い海、牛尾昭。